

全校研究



「児童生徒一人一人が主体的に学び、学びを広げる姿を目指した 国語の授業づくり」

(2年次/2年計画)

1 主題設定理由

(1) 令和4年度の研究課題から

令和4年度の課題として、思考・判断・表現に関わる、児童生徒一人一人の実態に応じた主体的な学びが不十分であったことが挙げられた。そして、その要因を「言葉から内容や様子をイメージする」「必要な情報を取り出す」「教師の説明や資料から新たな知識を得る」(聞く・読む)、「自分の考えをまとめたり、伝えたりする」(話す・書く)等、国語科における育成を目指す資質・能力や言語能力の不足と捉えた。昨年度から継続する本研究では、これらの力は学習の基盤となる資質・能力であり、教科等横断的な視点に立って育成し、学びへの興味・関心や思考・判断・表現等の主体的に学ぶ力につなげたいと考えた。

(2) 学習指導要領から

① 主体的な学びについて

学習指導要領では、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこととしており、「主体的な学び」の視点を「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」としている。

② 学びを広げるために

特別支援学校小学部学習指導要領の知的障害教育の各教科の第2「指導計画の作成と各教科全体にわたる内容の取扱い」では、次の記載がされている(中学部・高等部はこれに準じる)。

・個々の児童の実態に即して、教科別の指導を行うほか、必要に応じて各教科、道徳科、外国語活動、特別活動及び自立活動を合わせて指導を行うなど、効果的な指導方法を工夫するものとする。その際、各教科等において育成を目指す資質・能力を明らかにし、各教科等の内容間の関連を十分に図るよう配慮するものとする。

本研究においても、国語科における児童生徒一人一人の実態に応じて育成を目指す資質・能力を明確にし、各教科等の内容を関連付けて指導計画を作成して指導を実践し、他の学習や生活場面において学びを活用するなど、学びを広げる姿を育みたい。

③ 国語科の指導の重要性から

さらに学習指導要領では、学習の基盤となる資質・能力である言語能力の育成を重視している。特に「言葉を直接の学習対象とする国語科の果たす役割は大きく」、「言語能力の育成が図られるよう、国語科を要としつつ、教育課程全体を見渡した組織的・計画的な取組が求められる」としている。これらは国語科を重視する本研究の方向性と合致している。

以上より、本研究主題を設定した。

2 主題の捉え

(1) 一人一人が主体的に学ぶ姿

① 学びのめあてや意義をもつ

児童生徒一人一人の適切な目標が設定された指導計画のもと、単元や本時のめあて、活

動内容が分かり、学ぶことへの興味・関心や学習上、生活上の必要感をもつ。

② 自ら思考・判断・表現する

児童生徒一人一人が、既習の知識・技能を活用しながら、質の高い学習活動に取り組み、自ら思考・判断・表現して、生活に生かせる知識・技能を習得したり、課題を解決したりする。

③ 学びを振り返る

本時のめあてに沿って自分の活動を振り返り、成果や課題をもち、次時につなげようとする。

(2) 学びを広げる姿

- ・発達段階・生活年齢や国語科の系統性を考慮し、もう少しで（支援があれば）できる新しい学びを習得する。
- ・既習内容や自分の経験など、学んだことを他の学習や生活場面でも活用する。

3 研究仮説

国語科の授業づくりにおいて次の手立てを講じることで、「児童生徒一人一人が主体的に学び、学びを広げる姿」を育むことができるであろう。

柱1 国語科の段階、目標等の設定

柱2 教科等横断的な視点に基づく指導計画の作成

柱3 重点事項（「適切な言語環境づくり」「具体的に考える場面の設定と工夫」）に基づく、国語科の授業づくり・授業実践

柱4 各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用

4 1年次の研究の成果と課題・改善案

1年次の成果として、前述の柱1と柱2に関わる、「適切な年間目標の設定」「単元計画の工夫」が挙げられた。一方、課題として「指導内容の定着」が挙げられた。「学習理解に時間がかかる」「学習で得た知識や技能が断片的になりやすい」といった知的障害の特性をもつ児童生徒一人一人の国語科の指導内容の定着を図るためには、日常の継続的で一貫した指導が不可欠である。

そこで、2年次の研究では授業づくりの重点事項を「適切な言語環境づくり」「具体的に考える場面の設定と工夫」とし、児童生徒一人一人の目指す姿の実現に迫る。1年次の課題に対する改善案として、第一に「適切な言語環境づくり」（柱3、p5 参照）を挙げる。個々の資質・能力を育むために、適切な言語環境づくりは国語科の授業だけでなく他の学習場面でも重要であり、教科等横断的な視点で進める必要がある。第二は「学びを広げる姿を育む仕組み」（柱4、p6 参照）である。昨年度の研究アンケートでは「各教科等を合わせた指導等において学びを広げる姿を育むことが不十分だった」とする回答が43%であり、「ほぼできた」「十分できた」とする回答38%を上回った。柱4に掲げる「各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用」を実現するためにも国語科の指導内容と他の学習での活用場面を関連付けるツールの活用等、仕組みづくりが必要と考える。

5 研究計画

次の表1のように研究を進める。

表1 研究計画

期 日	会 名	内 容		
		小学部	中学部	高等部
4月17日		●全校授業研、学部授業研の授業者、日時の選定		
4月24日	全校研究会①	●令和6年度の全校研究 ▶ 全校研究の概要、研究計画 ▶ 指導内容確認表及び学習指導要領解説または及び同解説（各教科等編）を活用した国語科の学習状況の把握の方法 ▶ 4/26の学部研①の内容を実施		
4月26日	学部研①	●個々の児童生徒の国語科の学習状況の確認【柱1】 ▶ 令和5年度の指導内容確認表（チェック済み）を活用して学習状況を確認する。（各クラス） ▶ ○、△の内容について学習指導要領解説（各教科等編）を読み、確認する。 ● 個々の児童生徒の段階、目標の設定【柱1】 ▶ 昨年度末の評価や個々の課題に関わるキーワード等をもとに個別の指導計画の年間目標を設定し、グループ協議を行い、加除修正する。		
5月13日	学部研②	●国語科の年間単元・題材等の設定【柱1、2】 ▶ 学習指導要領解説（各教科等編）、星本や解説書を活用して、年間目標を達成するための年間単元・題材を設定し、年間指導計画に反映させる。 ● 提示授業対象の単元設定【柱2】 ▶ 国語科の提示授業対象の単元を選定する。 ● 学んだことの活用に関わる計画【柱2、4】 ▶ 学んだことを他の学習場面で活用できるように、「対象児童生徒」「指導の形態」「単元名」「学んだことを活用する具体的な場面」を計画し、記入する。		
6月6日	学部研③	●教科等横断的な視点に基づく指導計画の修正【柱2】 ▶ 国語科と各教科、各教科等を合わせた指導の関連付け ●単元配列表の作成		
6月19日	授業づくり研修会	●各教科等における「適切な言語環境づくり」について【柱1】 ▶ 講義 ▶ グループ協議 ▶ 指導助言		
7月25日	学部研④	●単元計画①（学部授業研究会）の検討【柱3】	●授業を見合う会VTR紹介①（重点事項の確認）	授業を見合う会VTR紹介①（重点事項の確認）
8月22日	学部研⑤	●学部授業研究会 ※日程調整	●単元計画①（学部授業研究会）の検討	●単元計画①（全校授業研究会）の検討 ●模擬授業 ※日程調整
9月24日	全校授業研究会①			●高等部授業提示

9月25日	学部研⑥	●授業を見合う会VTR紹介①（重点事項の確認）	●学部授業研究会	●授業を見合う会VTR紹介②（重点事項の確認）
10月23日	学部研⑦	●授業を見合う会VTR紹介②（重点事項の確認）	●単元計画②（全校授業研究会）の検討 ●模擬授業 ※日程調整	●単元計画②（学部授業研究会）の検討【柱3】
10月24日	全校授業研究会②		● 中学部授業提示	
11月20日	学部研⑧	●単元計画②（全校授業研究会）の検討 ●模擬授業 ※日程調整	●授業を見合う会VTR紹介②（重点事項の確認）	●学部授業研究会
11月27日	全校授業研究会③	●小学部授業提示		
【柱4】「各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用」については、計画的に授業実践して指導案や授業を見合う会記録に評価・改善案を記入する。				
12月19日	学部研⑨	●研究紀要「せんぼく」の執筆分担 ●学部授業研、全校授業研における単元評価（児童生徒の変容、重点事項の有効性）		
1月23日	学部研⑩	●研究紀要「せんぼく」の読み合わせ、加除修正		
2月25日	全校研究会②	●各学部の研究、全校研究について ●指導内容確認表及び学習指導要領を活用した次年度への課題整理		

6 研究内容

主に各学部でのグループ協議を通して、次の柱1～柱4について検討・改善を行った。

(1) 【柱1】国語科の段階、目標等の設定 ※資料1参照

① 個々の児童生徒の国語科の学習状況の確認

学習指導要領（各教科等）の目標や内容が整理された指導内容確認表（熊本大附属特別支援学校より）で学習状況を◎、○、△等でチェックし、「学習指導要領解説各教科等編」で理解を深め、児童生徒一人一人の国語科の学習状況を確認した。

学習状況の達成レベルの例

- ◎ : 完全に達成しており、学習や生活の中で安定して関連する行動が観察される。
- : ほぼ達成されており、学習や生活の中で概ね関連する行動が観察される。
- △ : 一部達成している、または支援を要する、環境の調整により行動が観察される。
- : 全く達成されていない。

② 個々の児童生徒の段階、目標、年間単元・題材等の設定

最近接の内容（例えば上記の△や○の内容）に焦点化しながら、学習状況に沿って段階、目標、年間単元を設定し、年間指導計画や個別の指導計画に反映させた。

児童生徒の実態に応じて、今できている事柄について題材を変えたり、活動への取り組み方を変化させたりして取組の幅を広げることも重視した。

(2) 【柱2】教科等横断的な視点に基づく指導計画の作成 ※資料2参照

① 国語科及び各教科、各教科等を合わせた指導との関連付け

単元配列表を活用して各教科、各教科等を合わせた指導等に関連付け、国語科で目指す資質・能力（＝個別の指導計画の年間目標）を他の学習や生活場面でも活用する場面を設

定し、年間指導計画に反映させた。

② 国語科の単元計画の作成

次のア～ウに留意して、各学部で対象単元に関わる単元計画を作成した。

- ア 今できている事柄を基盤として、これから課題として扱いたい指導内容を焦点化し、児童生徒一人一人の単元目標、段階を設定する。
- イ 児童生徒の発達段階に合わせ、繰り返し（家庭学習も含む）や発展性、系統性のある単元計画を設定する。
- ウ 各教科等を合わせた指導の単元との関連（学んだことの活用場面）を記載する。【柱4参照】

(3) 【柱3】重点事項に基づく国語科の授業づくり・授業実践

次の重点事項「適切な言語環境づくり」「具体的に考える場面の設定と工夫」に留意し、授業づくり・授業実践を進めた。

① 適切な言語環境づくり

個々の児童生徒の言語能力を育成するために、国語科に限らず、どの指導の形態でも適切な言語環境を整備することが重要である。各学部の教員で児童生徒にとって適切な言語環境について共通理解し、共通実践する必要がある。

ア 教師自身の言動の配慮

教師自身の言動は児童生徒の言語環境となる。授業だけでなく日常的な関わりからそのことを意識して行動する必要がある。例えば、次のような言動を行うよう配慮する。

主な配慮事項	内容
▶正しい言葉遣い・正確な文字の使用	助詞を入れて指示・説明するなどの正しい言葉で話す。 丁寧で正確な文字の使用を行う。
▶発達段階に応じた言葉の使用	二語文・三語文での提示、漢字やふりがなの使用など、児童生徒個々の発達段階に合わせた文や文字を活用したり、ふさわしい言葉を選んで話したりする。
▶分かりやすい言葉	短く簡潔に分かりやすい言葉で話したり書いたりする。
▶言葉の理解の確認	話の内容が児童生徒に正しく伝わったかどうか質問等を通して確認する。

イ 児童生徒の言語環境の整備

実際に国語科における目指す資質・能力（＝個別の指導計画の年間目標）を身に付けるために、次の例のように児童生徒の言語環境を整備する必要がある。

主な配慮事項	内容
▶聞きやすい環境の支援	児童生徒の実態に合わせた座席、立ち位置、動線の工夫、注目しやすくする視覚的支援、言葉掛け等を行う。
▶学習規律の定着	児童生徒の実態に応じて「話し手の顔を見る」「机上に必要なものだけを置く」など学習規律を提示し、定着を図る。
▶掲示物等の整備	言語活動の成果となる掲示物及び板書及び児童生徒にとって役立つ情報資料等を、正しい言葉遣い、見やすく、分かりやすい内容に配慮して掲示する。

② 具体的に考える場面の設定と工夫

知的障害の児童生徒の学習上の特性から身に付けた事項が断片的であったり、他の学習や生活の場面に生かせなかったりすることがある。そのため、児童生徒の思考・判断・表現を促し、既習の知識や技能を使って課題を解決できるように、児童生徒の実態等に応じた実際

的・具体的な活動や言語活動を通して、「気付く、思考する、選択する、発表する」など、具体的に考える場面を設定する。

次に、「具体的に考える場面の設定と工夫」に関わる視点とその内容について示す。

主な視点	内容
ア めあてとまとめの焦点化	導入での「めあての理解」、展開での「めあてを意識した活動」、終末での「まとめや振り返り」がしやすいように、本時のめあてを焦点化・具体化する。
イ 体験・動作化	自分でイメージして話したり書いたりできるように、道具の使い方など実際に体験したり動作化したりする。
ウ モデルの提示	自分の感想を話したり、作文を書いたりできるように、モデルとなる例文や文型等を提示し、活用や比較を促す。
エ 写真や動画等の提示	事実や気持ちを言語化したり、選択したりするための材料として、写真や動画、イラスト等を提示する。
オ 言語活動の創意工夫	コミュニケーション等の個々の実態に応じて、紹介や報告、発表、話し合い活動等の言語活動の場面を設定し、個々の役割の設定、話し合いの観点の提示等、創意工夫する。
カ 分類・整理	学習内容の習得、活用を促すことができるように、分類・整理して提示したり、自ら分類・整理したりするなど、活用の場面を設定する。

※特に視点ウ～カについて、児童生徒が具体的に考える手段として効果的に ICT を活用する。

(4) 【柱4】各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用

各教科等を合わせた指導等において、【柱3】の国語科の単元で学んだことを活用することで、般化を促したり、達成感を生み出したりするなど、学びを広げる姿の育成を目指した。次の①～④に示した学びを広げる姿を育む仕組みに基づいて実践した。

学びを広げる姿を育む仕組み
① 【柱2】で作成した単元配列表をもとにして、学部授業研究会、全校授業研究会、授業を見合う会の提示授業を行い、対象児童生徒1名を抽出して検証する。
② 国語科で学んだことを計画的に他の学習場面で活用できるように、指導案や授業を見合う会記録に事前に「指導の形態」「単元名」「本単元で学んだことの活用場面（具体例）」を記載する。
③ 本単元のまとめとして、重点事項「適切な言語環境づくり」「具体的に考える場面の設定と工夫」に基づき、成果及び課題・改善案を記載する。
④ 単元終了後、②に基づいた「各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用」に関わる授業実践を行い、成果及び課題・改善案を記載する。

7 研究の実践と評価

(1) 授業づくり研修会及び全校授業研究会、学部授業研究会の実施

授業づくり研修会では助言者から「適切な言語環境づくり」について講義をいただいた。また、「学部として共通実践する言語環境づくり」について各学部で協議を行い、具体化・焦

点化して共通実践事項を整理した。

各学部で国語科を提示授業とした、学部授業研究会、全校授業研究会を1回ずつ（計6回）行った。全校授業研究会では、指導助言者から授業改善につながる助言を受けた。

表2 全校授業研究会 一覧

実施日	学部	学年・単元名		指導助言者
9月24日	高等部	1~3年	聞く力を高めよう① ～インタビューになりきって～	秋田大学教育学部 教授 藤井 慶博 氏
10月24日	中学部	3年	修学旅行をプレゼンしよう① ・東京ディズニーランド編	大曲支援学校 教諭(兼)教育専門監 大川 康博 氏
11月27日	小学部	4・6年	くいずをつくってはっぴょうしよう	大仙市立太田東小学校 校長 櫻田 武 氏

(2) 授業を見合う会の実施（一人一授業の実践） ※資料3、4参照

一人一授業の提示となるように、次のように授業者と参観者が授業提示及び参観を行った。

① 授業者

ア (1)の授業者以外の授業者が7月～12月に授業を提示（計8名が1回ずつ授業提示）する。

イ 授業者は、「単元の個人目標」、「本時の目標」と「重点事項（具体的に考える場面設定と工夫、適切な言語環境づくり）」について事前に「授業を見合う会の記録」に簡潔に記述し、授業を提示する。

ウ 学部研究会で授業 VTR を紹介し、自己評価及び参観者からの意見（成果、課題・改善案）を「授業を見合う会の記録」にまとめる。

② 参観者

重点事項の有効性について評価し、ロイロノート共有ノートのデータに記述する。

(3) ICT 指定授業の実施

全校の提示授業の中から1回を ICT 指定授業として実践した。ICT 活用研修会において VTR で授業提示し、グループ協議を行った。

(4) 単元の評価 ※各学部の事例を参照

学部研究会で国語科の提示授業の単元において、目指す姿の変容、授業づくりの重点事項（適切な言語環境づくり、具体的に考える場面の設定と工夫）の有効性、「各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用」について評価した。

(5) 全校研究アンケートの実施

次の研究の柱1～4に関わる研究実践及び「児童生徒一人一人が主体的に学び、学びを広げる姿」について総括的に評価した。

柱1 国語科の段階、目標等の設定

柱2 教科等横断的な視点に基づく指導計画の作成

柱3 重点事項（「適切な言語環境づくり」「具体的に考える場面設定と工夫」）に基づく、国語科の授業づくり・授業実践

柱4 各教科等を合わせた指導等における学んだことの活用

8 全校研究における成果と課題

(1) 成果

① 国語科と他の学習場面との関連付け

全校研究アンケートでは、授業担当者のうち「国語科と各教科を合わせた指導等の関連付け」や「国語科の単元計画の工夫」が「十分できた」「ほぼできた」とする肯定的評価が94%であった。また、同アンケートでは「『各教科等を合わせた指導』等における国語科の対象単元で学んだことの活用」が「十分できた」「ほぼできた」とする回答が71%であった。昨年度(50%)と比較しても「学んだことの活用」が進んでいることが分かる。

単元配列表を活用して国語科と他の学習を関連付けて年間指導計画に反映させたり、指導案や授業を見合う会記録に事前に「(国語科の)本単元で学んだことの活用場面(具体例)」等を記載し単元計画を設定したりしたことで、国語科で学んだことを計画的に他の学習場面で活用することができたと考える。

② 「適切な言語環境づくり」に関わる学びと実践

授業づくり研修会(6月実施)では、授業づくりの重点事項「適切な言語環境づくり」について学んだ。また、授業研究会ではその視点に沿って授業づくりや授業参観を行い、正しい言葉遣い・正確な文字の使用、発達段階に応じた言葉の使用、聞きやすい環境の支援、学習規律の定着などについて意識が高まった。

さらに各学部で「適切な言語環境づくり」について協議し、共通実践事項として整理し実践した。具体的には小学部では「聞くときの約束」、中学部では「中学部の約束」、高等部では「(授業の始めの)ウォーミングアップ」を日々の実践に取り入れ、聞くときのマナーや集中力の向上等において一定の成果が見られた。

(2) 課題

① 指導内容の確実な定着を促す工夫

知的障害のある児童生徒の学習上の特性として「学習によって得た知識や技能が断片的になりやすいこと」や「実際の生活の場面で生かすことが難しいこと」等が挙げられる。児童生徒一人一人の国語科の指導内容の確実な定着を図るためには、次の3点が重要と考える。

ア 教材研究… 教材研究とは指導内容を深く理解し、児童生徒の特性や学習環境に応じて最適な指導法を検討する過程を示す。指導内容の定着を促すためには星本教科書解説や参考図書等を活用した教材研究と実践を積み重ねることが大切である。

イ 国語科と他の各教科、各教科等を合わせた指導との関連付け…単元配列表を活用した各教科等間の関連付けを継続し、国語科で学んだことを他の学習で活用する機会を確保する。

ウ 教員間での児童生徒の学習状況等の共有…上記のア、イを確実に実践するために授業担当者間で学習状況や指導内容等の情報を共有し連携して指導することを重視する。

② 学習指導要領に基づいた資質・能力の明確化

全ての指導の形態において、学習指導要領の各教科等の目標や内容に基づき、児童生徒一人一人に応じた資質・能力を明確化して育成することが大切である。特に、学習指導要領では、「各教科等を合わせた指導を行う場合においても、各教科等の目標を達成していくことから、育成を目指す資質・能力を明確にして指導計画を立てる必要がある」とされている。今後は、各教科等を合わせた指導においても各教科等の目標を設定し学習評価を行い、根拠に基づいた資質・能力を育成する必要があると考える。

8 参考文献

- (1) 「特別支援学校学習指導要領解説 総則編(小学部、中学部)」、2018、文部科学省
- (2) 「特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部、中学部)」、2018、文部科学省
- (3) 「特別支援学校新学習指導要領ポイント総整理・特別支援教育」、2018、全日本特別支援教育研究連盟
- (4) 「指導内容確認表」(熊本大学教育学部附属特別支援学校 教材掘りおこしプロジェクト)、2019、熊本大学教育学部附属特別支援学校
- (5) 「『各教科等を合わせた指導』と教科の考え方: 知的障害教育現場での疑問や懸念にこたえる」、2022、名古屋恒彦、教育出版
- (6) 「知的障害教育におけるアクティブ・ラーニング」、2017、武富博文、松見和樹、東洋館出版社
- (7) 「各教科等を合わせた指導と教科別の指導、自立活動などとの関連について」2019、伊藤甲之助、鎌倉女子大学研究紀要第26巻
- (8) 「知的障害のある子どものための国語、算数・数学: 『ラーニングマップ』から学びを創り出そう」、2020、山元薫・笹原雄介、ジアース教育新社
- (9) 「知的障害のある子どものための国語、算数・数学: 『ラーニングマップ』から学びを創り出そう Part2 授業づくり&教材開発編」、2023、山元薫・笹原雄介、ジアース教育新社
- (10) 「障害の重い子どもの目標設定ガイド 第2版: 授業における「Sスケール」の活用」、2021、徳永豊、慶應義塾大学出版会